

首長墓成立の一背景

——群馬県前橋市、今井神社古墳とその周辺集落の動向——

坂 口 一

1 はじめに

前橋市街地の東方約10kmの今井町には、5世紀後半に築造された前方後円墳である今井神社古墳⁽¹⁾が立地している。この古墳は墳丘長74.5mの規模をもち、周堀の発掘調査によって円筒埴輪が検出されており、これらの編年観からこの周辺地域で初出の前方後円墳であるとの位置付けがなされている。

一方、この古墳が立地する前橋市今井町の周辺では、沖積低地に隣接した台地上で集落遺跡が発掘調査され、特にこの古墳に最も近接している荒砥北三木堂遺跡では、この古墳が成立する時期に集落の急激な増加があることが判明している。⁽²⁾また、荒砥北三木堂遺跡に隣接する沖積低地では、古墳時代の水田跡の存在が発掘調査によって明らかになってきた。⁽³⁾さらに、古墳の西側を南流する貴船川を挟んだ西側に位置する筧井八日市遺跡では、5世紀後半の豪族居館である可能性が高い遺構も検出されており、⁽⁴⁾この地域は墳墓のみならず集落やその生産の基盤である水田をも含めて、総合的に遺跡の動向を検討することのできる資料が整いつつある。

したがって、ここでは今井神社古墳が成立する5世紀後半の時期に集落や水田などで起きている諸現象を整理した上で、これらと古墳との関わりを検討し、この古墳の成立の背景を探ることを目的とした。

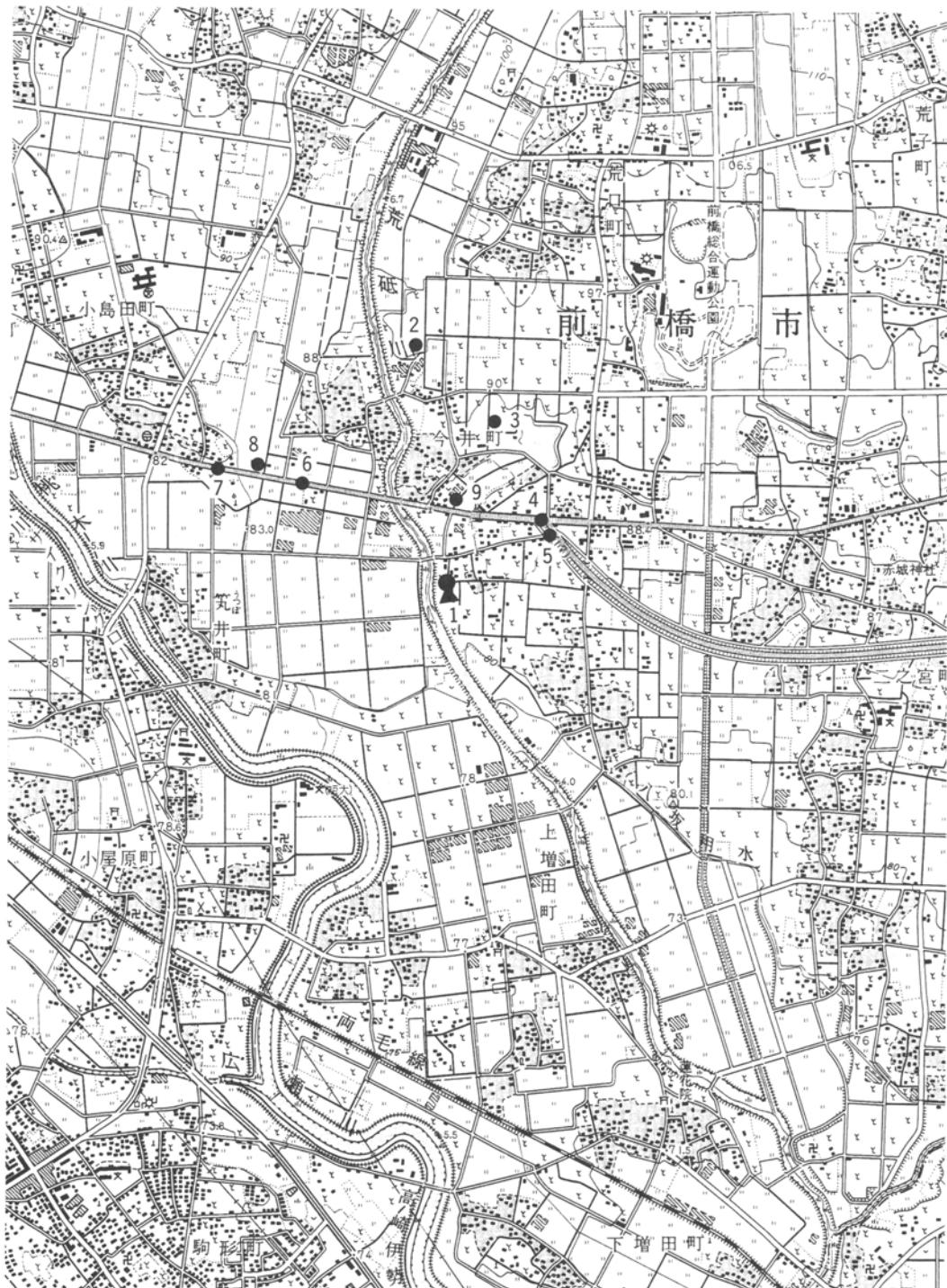
2 今井神社古墳周辺の遺跡の概要

今井神社古墳の周辺には数多くの遺跡が分布している。ここでは、この周辺に分布する主な遺跡についてその概要を記したい(図1)。

(1) 墳 墓

今井神社古墳は赤城山の南麓の末端部に立地し、赤城山を南流する荒砥川の左岸に位置している。墳丘長74.5m、後円部径44m、前方部前幅50mの規模をもつ2段築成の前方後円墳で、後円部を北側に向けて台地の縁辺部に構築されている(図2)。⁽⁵⁾周堀の発掘調査によって出土した円筒埴輪は、外面に二次調整のB種ヨコハケを施すものと、一次調整のタテハケを施すものの2種類⁽⁶⁾が存在し、川西宏幸氏はこれらを氏による円筒埴輪の編年のIV期に位置付けている。

これらの円筒埴輪は、群馬県下では富岡市に所在する下高瀬上之原遺跡4号墳出土のものに形態が近似し(図3)、二次調整のB種ヨコハケを施すものと、一次調整のタテハケを施すものの量比も近い。⁽⁷⁾下高瀬上之原遺跡4号墳からはTK-208型式に比定できる須恵器把手付椀が出土していることから、今井神社古墳の年代は須恵器型式のTK-208型式～TK-23型式に平行する時期で、5



1 : 今井神社古墳 2 : 荒砥北原遺跡 3 : 荒砥北三木堂遺跡 4 : 今井道上遺跡
 5 : 今井道上道下遺跡 6 : 今井白山遺跡 7 : 筑井八日市遺跡 8 : 沖積低地 1 9 : 沖積低地 2

図1 遺跡位置図（2万5千分の1 『大胡』）

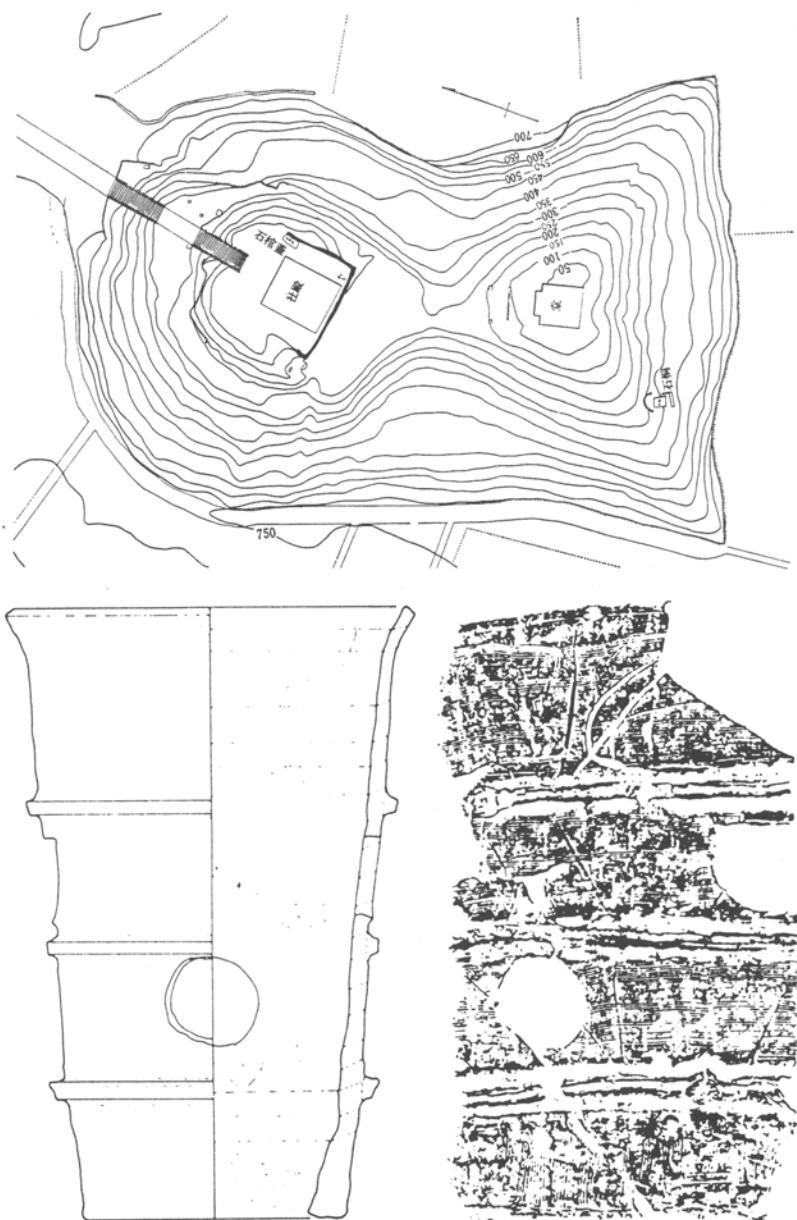


図2 今井神社古墳及び埴輪

世紀第3四半期を中心とする年代に比定することができよう。

なお、この古墳に隣接して3基の円墳が発掘調査されているが、いずれも6世紀以降に比定されている。⁽⁸⁾また、荒砥川に沿った約1km程北側に位置する荒砥北原遺跡では、4世紀代の方形周溝墓が発掘調査されているが、周辺に古墳時代前期に比定される前方後円墳は存在しない。⁽⁹⁾

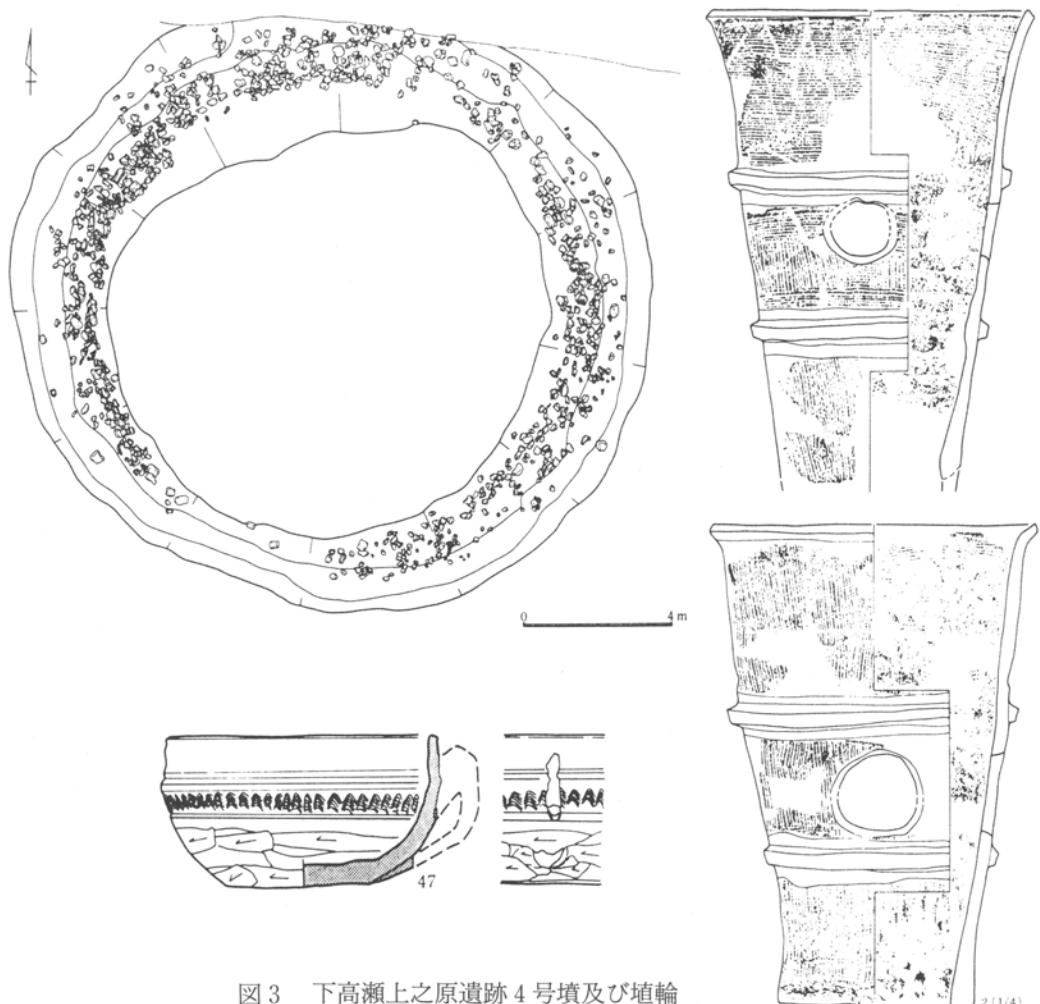


図3 下高瀬上之原遺跡4号墳及び埴輪

(2) 集落

荒砥北三木堂遺跡⁽¹⁰⁾

この遺跡は今井神社古墳の北側に位置する沖積低地の縁辺部に立地し、弥生時代中期から平安時代にわたる78軒の堅穴住居が検出されている。このうち、弥生時代の住居は中期後半に属す5軒のみで、その後に継続性はみられない。一方、古墳時代の堅穴住居は60軒で、その消長をみると、5世紀初頭で出現した堅穴住居がその後で最も増加し、6世紀前半で消滅する。すなわち、この遺跡で検出した堅穴住居の大半が5世紀代に営まれている(図4)。

なお、5世紀代に分類できる55軒の住居のうち、約35%にあたる20軒の住居から初期須恵器・古式須恵器が出土し、この時期における須恵器の出土頻度は県下でも突出した高さを示している。

今井道上遺跡⁽¹¹⁾

この遺跡は今井神社古墳の北東側に位置し、今井神社古墳の北側に位置する沖積低地の東側の台地上に占地している。古墳時代中期から平安時代にわたる35軒の堅穴住居が検出され、この大

半は古墳時代に属し、5世紀後半から7世紀後半にかけて継続した集落の営みを認めることができる(図5)。この調査区域からは8世紀代の竪穴住居の検出例はないが、隣接する同一遺跡の今井道上道下遺跡にはこの年代の住居が存在している。

⁽¹²⁾ 今井道上道下遺跡

この遺跡も今井神社古墳の北側に位置し、今井道上遺跡と同一の遺跡である。この遺跡は古墳時代前期から平安時代にわたる64軒の竪穴住居が検出され、これらは各年代による住居の増減はあるものの、4世紀代から10世紀代にかけてほぼ継続的な集落の営みが認められる(図6)。

なお、この遺跡は今井道上遺跡と同一の遺跡であることから、両遺跡を通じた竪穴住居の推移をみると、6世紀代をピークとして4世紀代から10世紀代にかけてほぼ連続した集落の営みが認められることになる。

⁽¹³⁾ 今井白山遺跡

この遺跡は今井神社古墳の西側を南流する荒砥川の扇状地上に立地し、縄文時代から平安時代にわたる52軒の竪穴住居が検出されている。このうち縄文時代は敷石住居が1軒で、他は古墳時代以降であり、古墳時代前期の4世紀代から10世紀代の平安時代にかけて、ほぼ継続的な集落の営みが認められる(図7)。

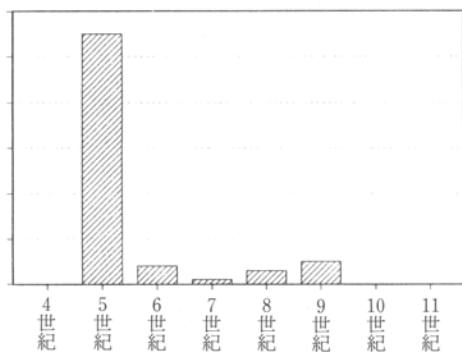


図4 荒砥北三木堂遺跡竪穴住居変遷図

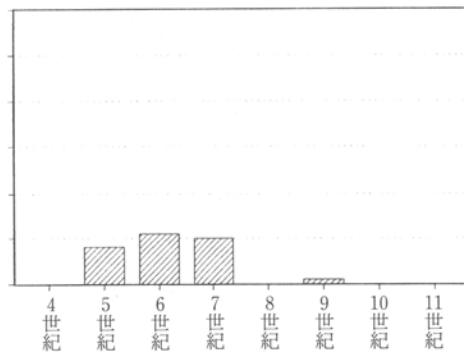


図5 今井道上遺跡竪穴住居変遷図

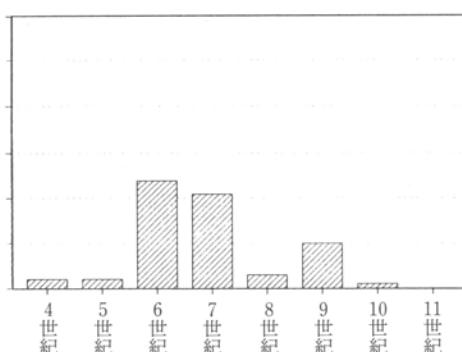


図6 今井道上道下遺跡竪穴住居変遷図

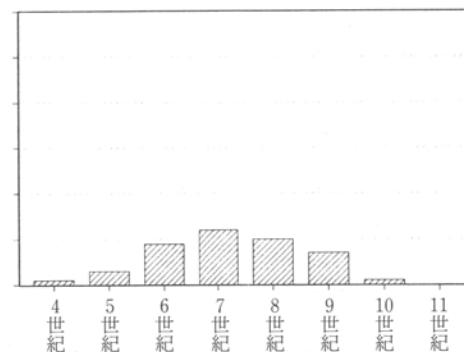


図7 今井白山遺跡竪穴住居変遷図

(3) 水田

貴船川の低地を挟んで今井神社古墳の西側に位置する筑井八日市遺跡では、低地部で天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石層(As-B)に埋もれた平安時代の水田を検出している。また、この遺跡では古墳時代の水田遺構は確認できなかったものの、6世紀初頭に降下した榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)と、4世紀前半の浅間C軽石層(As-C)の直下の層のプラント・オパール分析を行った。その結果、Hr-FAの直下の層では稻作を行った可能性があり、Hr-FAの直上の層では稻作を行った可能性が高く、As-Cの直下の層では稻作の可能性がないという分析結果が出ている(図1-9)⁽¹⁴⁾。つまり、この遺跡ではHr-FAが降下した6世紀初頭前後の時期から、稻作を行った可能性が高いと判断することができる。

また、今井神社古墳の北側に位置する

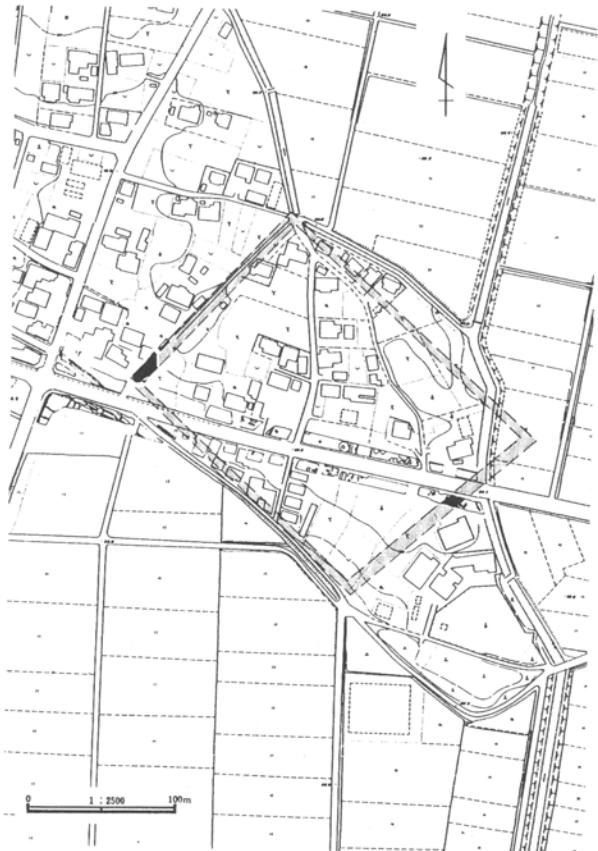


図8 筑井八日市遺跡居館推定図

沖積低地では(図1-8)、As-B、Hr-FA、As-Cの各テフラの直下の層でプラント・オパール分析が行われ、As-BとHr-FAの直下で稻作が行われた可能性が指摘されている。⁽¹⁵⁾つまり、この沖積低地でも4世紀代のAs-Cの段階では稻作耕作が行われた可能性が低く、Hr-FAが降下する6世紀初頭を前後する時期から稻作耕作が行われ、As-Cの直上の層でも少量のプラント・オパールが検出されていることから、この沖積低地における稻作耕作の開始年代は5世紀代まで遡る可能性が高いと判断することができる。

(4) 居館

筑井八日市遺跡では、豪族居館と推定される遺構の一部が確認されている(図8)⁽¹⁶⁾。この遺構は広瀬川低地帯と貴船川の低地に挟まれた台地の先端部に位置している。遺構の全体は確認されていないものの、幅8m、深さ1.5mの溝が、南北160m、東西200mの規模で方形に巡るものと推定できる。溝の底面に密着して出土した土師器壙と、溝の底面の直上に堆積したHr-FAの状況から、5世紀後半の築造と考えられる。

内部構造が全く不明であることから豪族居館と断定することはできないが、少なくとも2条の溝が東西200mの間隔を置いて台地を寸断することは事実である。

3 周辺遺跡の動向と画期

今井神社古墳が立地する前橋市の東部から勢多郡にかけての地域は、古墳時代前期の4世紀代から7世紀代にかけて方形周溝墓や古墳が営まれている。この地域は後の律令期に勢多郡域として推定できる地域である。徳江秀夫氏によれば、4世紀代には堤東遺跡、荒砥東原遺跡に前方後方型周溝墓が成立する。次に5世紀前半に墳丘長約59mで帆立貝式の赤堀茶臼山古墳が成立し、5世紀後半にこの今井神社古墳が出現する。

さらに、6世紀の初頭から後半にかけては、墳丘長93.7mの前二子古墳、同111mの中二子古墳、同85mの後二子古墳の3基の前方後円墳が相次いで成立し、その後7世紀代には小稻荷6号墳、⁽¹⁷⁾富士山古墳などの円墳が立地するという見解が示されている。

また、右島和夫氏は、赤城山の南麓地域は富田遺跡群、西大室遺跡群などの5世紀後半から出現する初期群集墳が成立する地域のひとつで、これらの群集墳と今井神社古墳などの有力前方後円墳の成立から、この時期における中小首長層の大規模農耕開発と、小地域を単位とした新たな地域統合が行われたという見解を示している。⁽¹⁸⁾すなわち、今井神社古墳の周辺地域は、4世紀代から継続的に方形周溝墓や墳墓の系列を辿ることができる。しかし、今井神社古墳が成立する5世紀後半以前には前方後円墳は存在しない。やがてこの古墳が成立する5世紀後半になると初期群集墳が出現し、さらに6世紀代には県下を代表する前方後円墳が成立する地域となる。つまり、この地域の墳墓の形成過程において、今井神社古墳はひとつの大きな画期になると解釈できよう。

一方、今井神社古墳に近接した集落遺跡である荒砥北三木堂遺跡、今井道上遺跡、今井道上道下遺跡、今井白山遺跡における竪穴住居数の推移をみると、個々の遺跡では集落の断絶する時期が存在したり、出現の時期に差が認められる。しかし、周辺部を総合的にみてみると集落は4世紀から10世紀にかけて継続的に営まれ、さらに5世紀の段階で急激な増加を示していることが分かる(図9)。特にこの傾向は荒砥北三木堂遺跡で最も顕著であり、この遺跡では今井神社古墳の成立する時期の5世紀後半に異常にみえる集落の増加が認められるのである(図10)。

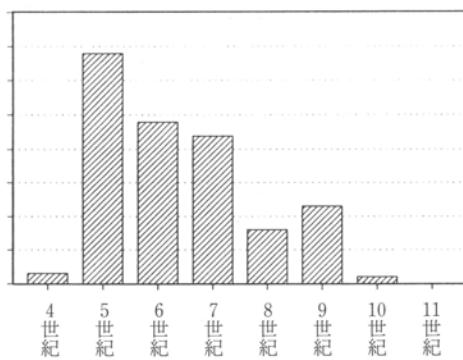


図9 今井神社古墳周辺遺跡の竪穴住居変遷図

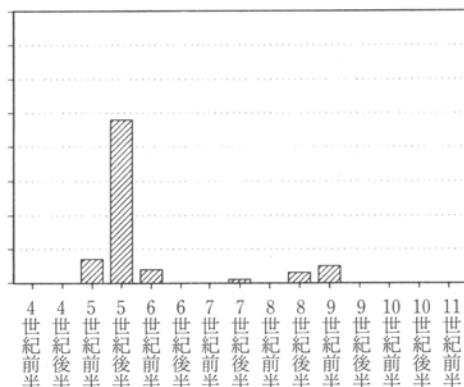


図10 荒砥北三木堂遺跡の竪穴住居変遷図

また、今井神社古墳に近接する沖積低地では、水田そのものは確認できないものの、プラント・オパール分析から Hr-FA の降下した 6 世紀初頭前後の時期から稻作が行われており、この開始時期は 5 世紀代まで遡る可能性が高い。さらに、筑井八日市遺跡では今井神社古墳に近接した時期の豪族居館と推定される遺構が出現している。

さて、今井神社古墳の周辺における遺跡の動向をみてきたが、今井神社古墳が成立する 5 世紀後半の時期にこの古墳の周辺で起きている現象は、次のように要約することができる。すなわち、①有力な前方後円墳が出現する、②近接する集落遺跡群の竪穴住居が、急激な増加傾向を示す、③集落遺跡に接する沖積低地で、水田耕作が開始された可能性がある、④貴船川を挟んだ筑井八日市遺跡で、豪族居館の可能性が高い遺構が成立する、の 4 点である。

4 今井神社古墳の成立の背景

かつて能登健氏は、表面採集による遺跡分布調査に基づいて集落の継続性による遺跡の分布パターンを設定した。⁽¹⁹⁾ さらに、発掘調査された遺跡によってこの分類を実証し、農耕地の拡大を前提とした居住域の拡大過程を明らかにした。つまり、集落の拡大過程を農耕地の拡大という視点で捉えたのである。

この考え方からすれば、5 世紀後半の時期に急激に増加する今井神社古墳周辺の集落には、この時期において農耕地が大幅に拡大されたと想定することができる。このことは今井神社古墳に近接する沖積低地において、稻作農耕が 5 世紀代から開始された事実を傍証とすることができよう。

さらに、今井神社古墳に近接する北三木堂遺跡において、この古墳が成立する時期の竪穴住居が急激に増加し、TK-208型式～TK-23型式に比定できる多量の古式須恵器の出土が見られることは、この古墳と北三木堂遺跡の集落との間に、密接な関係を認めざるを得ない。

すなわち、今井神社古墳の成立には、この周辺地域における農耕地の大幅な拡大をその背景として想定することができる。換言すれば、今井神社古墳はこの地域における水田耕作の開発を目的とする拠点として成立したものと言えよう。

こうしてみると、この地域の遺跡は今井神社古墳が成立する 5 世紀後半を契機として大きく変貌していることが看取でき、この古墳はこの地域における社会変化の大きな要因としての役割を果たしたと考えられる。

5 おわりに

今井神社古墳の成立の背景を、周辺地域における遺跡の動向という視点でみてきた。筆者はかつて同様な視点での分析を、群馬郡群馬町に所在する三ツ寺 I 遺跡の居館とその周辺の集落で試みた。⁽²⁰⁾ 結果として、三ツ寺 I 遺跡の周辺で起きている現象を、この地域にも認めることができた。そして、これはこれらの地域のみならず、おそらく各地に同じ現象を予測することができる。

そして、こうした分析にはひとつの遺跡に限定することなく広範囲な遺跡群を対象とした研究

が必要であり、個々の遺跡における適確な集落動態の把握がその分析の糸口になるものと確信している。

小稿を草するについて、当事業団の右島和夫・大木紳一郎・徳江秀夫・南雲芳昭・桜岡正信・津島秀章氏には有益な御指導と助言を賜った。また、英文要旨については Nathan Sturman 氏、奈良国立文化財研究所の松井章氏にご指導を頂いた。文末ながら記して深甚なる感謝の意を表す次第である。なお、本稿は「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成 6 年度職員自主研究活動」の助成金を受けて実施した、研究成果の一部である。

註

- (1) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『今井神社古墳』 1992
- (2) 坂口 一 「今井道上遺跡の集落構成と変遷」 『今井道上遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (3) 前掲注(2)に同じ
- (4) 坂口 一 『筑井八日市遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (5) 前橋市 『前橋市史』第 1 卷 1971
- (6) 川西宏幸 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』第64巻 2・4 号 日本考古学会 1987
- (7) 坂口一・南雲芳昭 「下高瀬上之原遺跡 4 号墳、5 号墳の出土遺物について」 『下高瀬上之原遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- (8) 石坂 茂 『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (9) 前掲注(8)に同じ
- (10) 石坂 茂 『荒砥北三木堂遺跡 I』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (11) 前掲注(2)に同じ
- (12) 大木紳一郎 『今井道上道下遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- (13) 飯島義雄 『今井白山遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (14) 前掲注(4)に同じ
- (15) 前掲注(2)に同じ
- (16) 前掲注(4)に同じ
- (17) 徳江秀夫 「古墳時代の地域概念」 『群馬における地域性の変遷』 群馬県地域文化協議会 1994
- (18) 右島和夫 「上野における群集墳の成立」 『東国古墳時代の研究』 学生社 1994
- (19) 能登 健 「里棲み集落の研究」—集落からみた農耕地の拡大過程とその背景— 『内陸の生活と文化』 地方史研究協議会編 雄山閣 1986
- (20) 坂口 一 「5 世紀代における集落の拡大現象」—三ツ寺 I 遺跡居館の消長と集落の動向— 『古代文化』第42巻 2 号(財)古代学協会 1990

Summary

An Aspect of Formation of the Chieftain's Mounded Tomb in the Kofun Period

— The Trends in the Imaijinja Mounded Tomb and the Settlements Surrounding It in Maebashi City, Gunma Prefecture —

by SAKAGUCHI Hajime *

This article aims to analyze the formation of the Imaijinja mounded tomb which is located in Maebashi city, Gunma Prefecture by trends of the settlements and wet-rice fields which were excavated around the tomb recently.

The Imaijinja mounded tomb has a 74.5 m length and Keyhole shapes and it is thought to be from the late 5th century AD by chronological sequence of Haniwa earthenware cylinders which were excavated in the ditch surrounding this tomb. In the area surrounding the tomb, there are several tombs which continued from the 4th to the 7th century AD, but the Keyhole shaped mounded tomb did not exist before the late 5th century AD. Then the early cluster of mounded tombs appeared in the late 5th century AD and then some large mounded tombs which have the Keyhole shapes appeared in the 6th century AD. That is, this tomb is an epoch-making one in terms of the changes of tombs in this area.

By the way, several settlement sites have been excavated at the heights neighboring the lowlands surrounding the tomb, namely Aratokitasangido site, Imaimichiu site, Imaimichiu-michisita site and Imaiakusan site. In these sites, pit houses existed in continuity from the 4th to the 10th century AD, but they suddenly increased in the late 5th century AD.

Moreover, a wet-rice field which was covered with Mount Asama's volcanic pumice in 1108 was excavated at Utsuboiyokaichi site which is located west of the Imaijinja mounded tomb. It had been previously covered with a layer of Mount Haruna's volcanic ash in the early 6th century AD and was identified as a wet-rice field by opal phytolith analysis on the site. In the lowland which is located between Aratokitasangido site and Imaimichiu site, a layer which was covered with Mount Haruna's volcanic ash in the early 6th century AD was identifiable as wet-rice field by opal phytolith analysis. So, cultivation of rice was begun before or after the 6th century AD when Haruna's volcanic ash was deposited and there is a possibility that the beginning of cultivation of rice dates back to the 5th century AD in this area.

Phenomena which happened in the late 5th century AD surrounding the tomb, are as follows:

- 1) A type of large mounded tomb of the Keyhole shape appeared.
- 2) The number of pit houses sharply increased in the settlements.
- 3) There is a possibility that wet cultivation of rice began in the lowlands.

As a result, in the late 5th century AD when the tomb was built, wet-rice fields expanded substantially, so settlements grew in this area. In another way, the Imaijinja mounded tomb is a focal point in the development of wet-rice fields in the late 5th century AD.

Key Words

Kofun period, Chieftain, Settlement, Wet-rice fields, Expansion, Mounded tomb

* Gunma Archaeological Research Foundation 784-2 Shimohakoda Oaza Hokkitsu-mura, Seta-gun Gunma-ken Japan